

平成17年度 岡谷演劇祭 上演台本 「人情時代劇」

「この子だれの子、あんたの子」

作・増沢和男
脚色・小林千冬

一幕「杉の屋の前」

踊り（男、涙の子守唄）

上手花道より「チンドン屋」出る。舞台、中央前まで進みながら口上。

チンドン屋 さてさて、ご来場の皆さま、これより演じますのは人情時代劇「この子だれの子あん

たの子 この子だれの子あんたの子」堂々四幕の上演でございます。時は江戸時代後半あたり、諏訪湖を岸にいたたく平野村の出来事でございます。平野村の宿屋「杉の屋」の前、大立ち回りが始まらんとしておりました。泣いて笑って、最後まで、ごゆりとお楽しみください。

2

チンドン屋、太鼓や鐘、笛などを打ち鳴らしながら下手へと退場。

沢山の通行人。「杉の屋」に客が入ると中から「いらっしやいませ」の声。日暮らしの音。初秋。花道より大塚源三郎、おこう、新吉走り出る

おこう 大塚源三郎 まてえ！（花道で）

新吉 父のカタキだ まてえ！

舞台中央の源三郎。おこう、新吉、刀を抜き構える。

おこう 大塚源三郎 主人のカタキ 覚悟しなさい！

新吉 ここで会ったが百年目 命は貰うぞ 源三郎！

そこに騒ぎを聞きつけた杉の屋に宿泊している客（三吉）がヤジウマの一番乗り。三吉はオカマらしい。

三吉 アラツなにサア どうしたのかしら

それをニンマリと確認する源三郎。何か魂胆があるのか？以後ヤジウマをかなり意識する。

源三郎 ふふふふ カタキ討ちだど？ははははは 拙者は人様からカタキ呼ばわりのされる覚

えなどないわ いい加減にしろ！

宿中より、番頭の妻、使用人のおフク出る

おフク お客さん 何をしているんだい？（宿の中から）

三吉 （宿の中に向けて）ねえねえ カタキ討ちみたいだよ 怖いわね

おフク カタキ打ちだつて！ほんとうに！（外に出る）

源三郎 まあまあ そんなに騒ぎなさんな（意識して）

おクフ　カタキ討ちだよ！カタキ討ちだあ！カタキ打ちだよおお！

宿屋「杉の屋」の番頭、文吉飛び出る

文吉　なんだって？カタキ討ちだつて（中から出てくる）いやいや本当だね

三吉　あたいが最初に見付けたんだからね

おフク　だからなんだい

三吉　あたいが仕切るよ

文吉　乗った！俺はお侍さんにかける

おフク　じゃああたしは　あの親子にかけるよ

三吉　さあさあ　カタキ討ちだよ　一発勝負だよ！さあハッタハッタ　誰かいないかい

刀の柄をしっかりと握り直し、気合を入れる新吉。さらに盛り上がるヤジウマたち。

新吉　十年前に　文左衛門を切った覚えがあるはずだ

源三郎　文左衛門？文左衛門だと　そんな名前は知らぬわ

おこう　新吉　今こそ父上の無念を晴らすのです　心してかかりなさい

新吉　わかりました母上　源三郎　覚悟！

新吉、切り掛かる。源三郎、軽くかわす。どよめくヤジウマたち。

源三郎 待て待て よつく聞け 拙者は人など切った覚えはない 他人の空似であろう

文吉 やっちゃえ やっちゃえ お侍さん負けるな！

おフク ねえねえ お侍さん・・・♡

源三郎 なんだ？

おフク 切られておしまいよ！

源三郎 バカを申すな！

宿屋「杉の屋」から女将のお静が出る。

お静 おフク おフクや いないね どうしたかしら (部屋の中で)

おフク (部屋の中の女将に) おかみさん大変だよ カタキ討ちですよ

お静 えっ！カタキ討ちだって？ (外にでる)

「杉の屋」の主人勘助出る

勘助 騒々しいね どうしたんだね (部屋の中で)

お静 (部屋の中の主人に) あんた うちの前でカタキ討ちですよ

勘助 カタキ討ち！おいおい 人の店先で何をやっているんだね (外にでる)

杉の屋の主人勘助がヤジウマに加わると、さらに熱くなる場外。もはやここは賭博場だ。「切られるのかな？」 「返り討ちかもね」 「やれやれ！」などの声が飛び交う。

源三郎 フフ だいぶ人が集まって来たわい

おこウ 源三郎 早く討たれてください えい！（突いていく）

源三郎、おこウをつき倒す。どよめくヤジウマ。

源三郎 いい加減にしないか 軽々しく命を落とすものではないわ それではごめん

源三郎、帰ろうとする。「卑怯だぞ！」などのヤジ。

おこウ そうはさせません ここで勝負！

新吉 母上 私にお任せ下さい この男は私が切ります

刀を構え切りかかる、源三郎かわす。

源三郎 そうかそうか そんなに私を切りたいのか・・・私も浪人の身の上だ いつ死んで

もいいのだが その前に拙者の話を聞いてくだされ

おこウ 話？何の話ですか この期におよんで

「どうなっているんだ」と、やはりどよめくヤジウマたち。源三郎の話に耳を貸す。

源三郎

まあ聞いてください。拙者には一人娘がおつてのう。母親は娘が六つの年に流行病で亡くなつてしまつた。それから拙者も娘をかかえての父子家庭。藩からもリストラされて収入がない。御上からの補助もなく。なんとか生き永らえては来たもの。もはやこれまでと。二人で横河の川岸まで足を運んだ……

同情しているヤジウマ。

源三郎

それでもと思いとどまり。幸いにも友人に娘を預けることができて。自分ひとりなんかかホームレスでやつてきたのだ。あれから十年。今日まで一度も娘と会つてはおりん。娘も今年十六・七。身から出た鱗とはいえ。拙者も人の親。日ごと娘逢いたさが募る毎日。今まで親として何もしてやれなんだ。奥方さん。拙者の心中お分かりいただけようか。

ヤジウマたち「何を言つてるんだ」と騒ぎたてている

新吉

そんな泣き言は聞きたくはない！刀を抜け！

ヤジウマたち、「そうだそうだ」と騒ぎ出す。

源三郎　まあ待て！分かってくれとは言わぬが　せめて死ぬ前に娘に何かしてやりたいが　今

はホームレスの身で金もなし・・・どうだ拙者の命　三両で買ってはくれぬか

ヤジウマ　えっ？

新吉　何ニイ！三両の金をくれだと

この言葉には全員が面食らう。

源三郎　そうすれば娘にその三両を届けてから　お主たちの望みどおり切られてやろう

せめて父親としてのケジメを付けたいと思うのだがどうじゃ

三吉　あいつ　そうとう虫がいいわね　かなりの強者よ

お静　自分の立場理解できてないんだよ　この勝負　あの親子でいただきだわ

三吉　女将さんは「親子」にかけるんだね（書き留める）

三吉、一人一人にどちらにかけるのか、書き留めて歩いている。本当に仕切ってる。

おこう　それは気の毒に・・・（巾着袋を覗く）

ヤジウマ　おっ？

新吉　母上？

おこう ちよと待つてくださいいよ（あちこちお金がないか探す）

新吉 母上！あつさり騙されてないでください なに血迷ってるんですか

おこう だけど 娘さんが気の毒で・・・でも三両も持ってないし お前持ってないかい？

新吉 気を確かに持つてくださいい こいつの口車に乗ってはいけません

源三郎 さめざめと泣いている

おこう （その姿に息を飲み、回りを見回しお静に）すみません三両貸し手貰えませんか！

お静 えっ？

新吉 母上！

三吉 あんた今どきのセレブだねえ もしかして「真光元」とかいう茶色い粉とか 変な健

康器具なんかも買ってんじゃないの？

おこう ……茶色い粉は偽物でした

三吉 ……

新吉 母上・・・（恥ずかしそうに）

お静 あんた騙されてると思うよ

おフク そうですよ 気をしっかり持って

おこう どなたか三両貸してください（泣き伏す）あの人があの人がかわいそうで・・・

三吉 あんた これからあいつを切るんだろう マニアックだねえ

勘助 よし 私が出そう！これでよかつたら使っておくれ

全員 えっ！

勘助 ほだされたんだよ いい話じゃねえか（すでにハンカチはびしょぬれ）

おフク 旦那さん！

おこう ありがとうございます きつとお返しに上がります

勘助 いや いいから使っておくれ そのかわりきつちり返り討ちにあってくださいよ

おこう ……ああ はい

おこう、源三郎に三両を渡す。

三吉 ……旦那さんは「お侍さん」ね（疑問をもちながらも書き留める）

お静 あんた こういうのアリなのかい

勘助 ツボだ ツボに入った 涙がとまらねえ（ハンカチを絞っている）

おフク ……旦那さん 趣味悪いですよ

源三郎、おこう、新吉、顔を見合わせてニヤツと笑う。

プロモスタート 「役者スタッフ紹介」

一幕二景「杉の屋の前」

すっかり詐欺にあつてしまった杉の屋の人々。夕暮れ近く。赤子の泣く声とする。

勘助の声 (宿の奥で) かあさんや ホタルが泣いているよ お美代や もう何とかしてくれ
お静 ああゝあ お美代はいないのかい

おフク、客に出す昼食の食材を庭に干してある長竿からつまんで選びだしている。そこに木曾の辰五郎親分と諏訪のヤクザ衆が現れる

辰五郎 おいおい おぼさん

おフク 誰がおぼさんだい!

辰五郎 おめえだよ!他に誰がいんだよ

おフク (ストレートは突つ込みにも食らつて) そうかいそうかい よかつたよ おじさんつて呼ばれなくて で 何だい?

辰五郎 近ごろこの辺を ヤクザ風の男が通らなかつたかえ

おフク ヤクザ風?知らないねえ この通りはいろんな人が通るからねえ

熊三 おい!隠すと為にならねえぜ

又八 そうだそうだ ちよいつといいい男なんだがなあ

文吉 知らないよ それじゃあ(おフク、上手にハケル かなり機嫌が悪い)

重 おおおお親分！さささ 佐吉のヤツはままま まだ来ないかも

富吉 来ていないかもしませんね

熊三 そうだなあ 先に行つちまったのかも知れねえ

辰五郎 おう！それじゃあ もう少し先に行つてみるとするか

重 へへへへい！そそそそ・・・そうしますか

ヤクザ衆（重の吃りに）コケながらハケる。三吉が宿からでてくる。

三吉 おやおや物騒だね あいつは確か木曾の辰五郎だね いったい誰を探してんのよ ちよ

いとヤバくね そろそろ退散するか

宿屋に入る三吉。杉の屋の中から大声で驚くお静の声

お静の声 ええええええつ！

宿の中から、お静、子供を抱いて出る。

お静 おフク！ おフク！

おフクが上手からでる。

お静 お美代！お美代！

おフク 女将さんどうかしたんですか？

お静 お美代を見なかつたかい？

おフク お嬢さんですか？ 私は知りませんが・・・ちよつと探してみましようか

お静 手紙

おフク えっ？

お静 さつき飛脚が手紙を持ってきたんだよ！ 佐吉だよ 佐吉からなんだよ

おフク 手紙？ 佐吉さん！

お静 そう

おフク 佐吉さんって じゃあホタルちゃんのもの？

お静 そうだよ この子の父親さあ 今日 ここに来るらしいよ

おフク それはまた急な

お静 さんざ探して見つからなかったのに 向こうからやって来るとはね

おフク 旦那さんには知らせたんですか？

お静 まだなんだよ すつかり詐欺にひっかかて どつかでしよぼくれてんだらうよ まっ

たく どこ行つちまつたんだらうね

おフク 三両ですからね しよぼくれますよ

お静 とにかく 探して来ておくれよ

おフク 旦那さんですか？お美代さんですか？

お静 どつちでもいいよ 早くお行き！

おフク はっはい！（と言いなながらもウロウロ）

お静 お前さん お美代！

お静、宿屋の中に入る、文吉出る。

文吉 なんだい血相変えて おフク！お客さまが腹をすかせているぞ 昼飯の支度はどうし

た！

おフク お前さん お美代お嬢さん見なかったかい？

文吉 お嬢さんが どうかしたのか

おフク そうなんだよ お嬢さんがいないだつて どこに行ったんだらう

文吉 いつものことだ その辺にいるだらう それより飯の支度だ

おフク そんな客なんてどうでもいいんだよ 大変なんだよ

文吉 何をぬかしやがる おめえは・・・

おフク 佐吉さんが帰ってくるんだよ

文吉 佐吉？・・・まさか あの佐吉が

おフク そうなんだよ

文吉 そりゃ大変だ お美代お嬢さんに言ったか

おフク だからいないんだよ

文吉 何やつてるんだ 早く探せ！

おフク　だからさつきから言ってるじゃないか

文吉　俺は川の方に行ってみるよ　お前は裏の土手の方に行ってみろ

おフク　わかったよ

下手花道より佐吉出る、舞台中央へ。

佐吉　久し振りだなあ　平野村か　何年振りかなあ・・・半年　いや一年振りかあ

杉の屋の入り口前で

佐吉　ごめんよ

文吉、探しに行く途中で振り返り

文吉　あつ！お前さんは

佐吉　おう！番頭さん　久しぶりだねえ　達者で何よりだ　おフクさんも変りはないかえ

おフクも、その声で振り返り。

おフク　あつ！佐吉　佐吉さん

佐吉 おおう おフクさん お久し振りです

おフク (佐吉に近づきながら) 何言ってるの やつと帰って来てくれたんだね

佐吉 なんだいそんなに俺のことが恋しかったのか?

文吉 (佐吉に近づきながら) 佐吉さん ずいぶん探したんだよ

佐吉 えっ俺を? またどうして

文吉 どうしてって

おフク これでお美代お嬢さんと子供と三人で暮らせるようになって おかみさんも旦那さん

も喜ぶよ 良かった良かった ね! お前さん

文吉 そうだ そうだ 良かった良かった (泣いている)

佐吉 ちよちよ ちよつと待ってくれよ 何が子供だえ 三人で暮らせるって? お前さんた

ちはいったい全体何を言ってるんだえ 俺は独り者だし 二三日やっかになったら又
旅に出るんだぜ

おフク おかみさん 旦那さま 佐吉さんが帰って来ましたよ

宿の中から勘助とお静が出てくる お静はホタルを抱いている

おフク 佐吉さんですよ 佐吉さんが帰って来たんです

勘助とお静は佐吉に腹を立てている。よって多少本意ではないことも口走ってしまふ。かなり感情的だ。

お静 佐吉さん……

勘助 あんた今までどこをほっつき歩いていたんだ

佐吉 何の話しだえ……番頭さん詳しく訳を聞かしておくんな

文吉 ああ まあちよいと 言いくいんだが……

おフク お前さんが一年前にここに泊まったときにお嬢さんとネンゴロになって

佐吉 何？おいおい 何を言ってるんだ

お静 お美代はあんたの子供を身ごもったんだ ほらこの子だよ ホタルちゃんさあ

ホタルちゃんは赤ちゃんだが、ちよつと何か変だ。体は小さいが顔がでかい。しかも、かなり人相が悪くて表情も変。そうとうグロテスクな赤ん坊だ。

佐吉 これか？

勘助 これとはなんだ ホタルちゃんだ

佐吉 確かに ここに泊まったが 俺は何もしちゃあいねえ

勘助 てめえ この期に及んで何を言ってるやがる

おフク、帳簿を持ってくる。お静、ホタルを勘助に渡して、帳簿を受け取る

お静 お美代があんたの子だつて言ってるんだよ

佐吉 ……俺じゃあないだろう

お静 お美代はあれからおかしくなっちゃまって この子に乳もやっちゃあいないんだよ あ
たし達もほとほと困っていたんだ 何とかしておくれよ
佐吉 でも あつしはこれから旅に出ますよ

その言葉にがく然とする文吉、おフク。勘助とお静は形相を変える。

文吉 佐吉さん 親子三人で暮らし始めたらどうだね

おフク そうだよ 旅なんかやめちまってさあ

佐吉 無茶いっちゃいけないよ あつしにやあ 関わりねえこつて

お静 佐吉さん これだけ言つても 旅に出るとおいかい

佐吉 あつしやあ 根つからの旅鳥 一つところに落ち着くなんざあ できねえ相談ですさ

あ

お静 この人でなし！じゃあこの子はいつたいたいどうなるんだい

佐吉 どうなると言われてもねえ

勘助 ああ わかった あんたがそういうつもりなら この子はお前さんの子供だよ どこ
でも連れてつておくれ

お静 あんた！

おフク 旦那さんそれは・・・

勘助 ほら あんたの子だ 抱け

佐吉 (子供を受け取りながら) ちよつと待つておくんなさいまし おお・・・かわいい顔

してるねえ

勘助 そうだろう 佐吉 あんたソツクリだよ

佐吉 お前さん方 何を言つてるんだ 冗談じゃないよ この子はお返ししますよ

佐吉、子供をおフクに返す。佐吉三度笠、カッパを羽織る。

佐吉 おかみさん 冗談じゃない あつしはこれでお暇します ごめんなすつて

お静が通せんぼで止める。

佐吉 どいてください

お静 佐吉さん お美代は気の癪にかかつて とてもこの子を育てられない あたしらもこの宿屋で手一杯なんだよ 父親のあなた様に育ててもらうのが この子も幸せ・・・

お静、部屋の中よりおぶいヒモ、おしめを持ってくる。

文吉 女将さん・・・

おフク やつぱりダメだ 女将さん ホタルちゃんを渡しちやいけませんよ どうしてこんなかわいい子を・・・せめてお美代さんに気持ちを聞いてから。

佐吉　　そうでしょう？

お静、おフクからホタルを奪い取ると、それはダメだと首を横に振る。佐吉にそのまま押し付ける

お静　　幸せにしてください　頼みます（泣きながら中に入る）

勘助　　佐吉さん　お美代のためだ　この子をここに置いて行かれちゃ困るんだ　お美代はこのままじゃ生きちゃいけねえ　これじゃああんまり惨過ぎる　だったら　だったらこの子はおんたのところまで育てた方が・・・

佐吉　　・・・旦那さん

勘助　　これはほんの気持ちだ（金を渡す）

佐吉　　みんなして何だい　どうなってるんだい

文吉　　こんなことになるなんてなあ　・・・（泣いている）

おフク　　ホタルちゃん　あたしたちを責めるんじゃないよ（泣いている）。この言葉は使用人としてはしょうがない状況だった）

佐吉、ホタルを抱いたまま立ち往生

佐吉　　あんなたち　情つてものはねえのか

皆　　宿に入り扉を閉めてしまう

佐吉　　おい！

シーンと静まり返る杉の屋。ホタルの泣き声。そこに三吉、旅仕度で現れる。

三吉　　ねえ　旅の人

佐吉　　なんだ

三吉　　あんたがこの子を育てられるか　カケテみるかい

佐吉　　とんでもねえや

三吉　　あらそう　・・・あんた佐吉っていうのかい

佐吉　　ああ　そうだ

三吉　　ヤバイ連中があんたを探してるよ　早くこの村から出た方がいいよ

佐吉　　ヤバイ連中？

三吉　　じゃあね

三吉、行ってしまふ。赤ん坊が泣き出す。

佐吉　　困ったなあおお　よしよし・・・

佐吉が上手から去ると、下手花道より狂乱のお美代。唄いながら

お美代 (唄) ねんねん ころりよ おころりよ 坊やは良い子だ ねんねしな

おフク、お美代に気づいて近づく。

おフク お嬢さん お嬢さん どこに行つてたんですか？ (お美代の手をとる) さあ 家に帰

りましょう

お美代 ふふふ ふふふふふ

おフク お美代さん……

お美代、家の中に入る

文吉 おかみさん お嬢さんがお帰りですよ

お静 家の中に入れるんじゃないよ まだ ホタルが居なくなつたこと知らないんだからね

文吉 もう入つてしまいました

お静 なんだって！

お美代、狂つて出てくる。

お美代 (状況を分かつていない、ふわふわした感じで) ホタル ホタルがない ホタルが

いない どこに行ったの？ホタル ホタル 私の子供 ホタル ホタルがいない どこなのホタル ホタルや（素足で外に飛び出る）ホタル ホタル どこにいるの？

お静、勘助、文吉、おフク、後を追いついでる。

お美代 私のホタル ホタル ホタルや（正気に戻って） どこに行ったの！ホタル！

お美代、中央に倒れる。

幕

二幕 「街はずれ」

人里から離れた一本道、道祖神があり土手の裏に小川が流れている。下手手花道よりチンドン屋

チンドン屋口上 さてこれより第二幕 一年ぶりに「杉の屋」を通りかかった旅鳥の佐吉。身に覚

えの無い乳飲み子を押し付けられ途方にくれておりました。お美代は かわいそうに
我を忘れて辺りをうろつく毎日。さて、旅鳥の佐吉。乳飲み子を背負ってまた旅にで
ました。佐吉の運命は如何に。

チンドン屋、上手に退場。

下手花道より源三郎、おこう、新吉現れる。三人で押す手押し車には「大塚座」とか「大入り満員」
とか登り旗が掲げられている。どうやらこの三人は親子の旅芸人一座らしい。

源三郎 おこう 今回の稼ぎは いかほどになった

おこう (袋をのぞき) えくと 三両と七分五銭でございます

源三郎 はははは そうか 久しぶりに大金が入ったなあ 三両とはうれしいねえ えっ新吉

新吉 そうだよ親父 あの女将さんに必死で頼み込むお袋の姿 目に浮かぶぜ はははは

おこう そりゃあそうさ 人の良さそうな顔してたし、番頭も間抜けなようだったしね。

新吉 あの旦那 俺たちの芝居にボロボロ泣いちゃってさあ ちよつとかわいそうだったか？

おこう 何言っつてんだい新吉 喜んで金を恵んでくれたんだ あたしはいい仕事をしたんだ

よ ねえアンタ

源三郎 そうだそうだ おこう 久しぶりに今晚は豪勢な飯が食えるぜ 酒も一本多くなあ

新吉 よし 今日のパア一つと行こう お袋どうだい

おこう そうだね 今夜は太っ腹で行こうかね

突然辺りが騒がしくなる。物々しくヤクザに囲まれる詐欺師の親子。

源三郎 アンタ達！いったい何なんだ

辰五郎 実はなあ。男を探してるんだ。（刑事のように懐から写真を出して）こういうの。

虎吉 佐吉っていうんだよ。その辺で見なかったか？

熊三 この辺はあらかた探したんだが見つからねえ。おめえ、知らねえか？

又八 知らねえなあ。

熊三 おめえに聞いてんじやねえ

又八 ソリー

熊三 ……

辰五郎 おかしいなあ そろそろこの辺をとおりかかる筈なんだが

源三郎 見たことありませんね。

重 かかかかかかかか 隠すと たたた ために なな ならねえ ぜぜぜ

富吉 ならねえぜ。

おこう 知りませんよ。そんな男 見たこともない

新吉 俺、その人知ってるよ

源三郎 えっ？

新吉 あっちの川で熊と水浴びしてた

源三郎 バカ！そんなのが通用するか

ヤクザ達、恐ろしい形相で三人を睨みつける

源三郎 あ あのう 今のは・・・

辰五郎 野郎ども

子分達 へい

辰五郎 行くぞ！

子分達 へい！

ヤクザたち、そちらに向かう

おことう 通用したね

新吉 はははは うまく撒いてやった

源三郎 撒く必要があったのか？

おことう そうだよ 「知らない」で済んだじゃないか

新吉 そうか はははは

源三郎 早くここを立とう 戻って来たら面倒だ
おことう 関わると ロクなことなさそうだからね

そこに旅鳥風の男 二度笠にカッパ 雰囲気がかなり悪そうだ

源三郎 また 何かやばそうな人が来たよ

おことう さつきの連中が探してる奴かい？

新吉 黙って通り過ぎよう

旅鳥は文治、笠もとらずに話かける。時折、片目の刀傷が目をはく

文治 おめえさん方

三人 はい！

文治 この辺の人かい

源三郎 いえいえ 私たちは 旅の一座ですが 何か？

文治 この先に「杉の屋」という宿屋があるはずなんだが あんた達そこに立ち寄ったかい？

新吾 ああ、立ち寄ったと言えば立ち寄ったよ

おことう 新吾！

源三郎 足がついたらどうすんだ 黙つとけ

文治 あんた達が何をしたかなんて どうでもいいんだよ ちよつと聞きてえことがあるん

だが

源三郎　　なな　何ですかい

文治　　そこにお美代という女がいただろう　元気そうだったかい

おこ　　さあ　そんな女は見なかったねえ　旦那と女将は元気そうだったよ

新吾　　今ごろ　しよげているかもしれないけどね

おこ　　新吾！

文治　　そうかい（旅鳥、源三郎が持っていた巾着袋を奪い取る）

源三郎　　何しやがんだ！

文治　　どうせ　人には言えねえ金だろう　貰つとくぜ

新吾　　ちよつと待てよ！

文治、　目にも止まらぬ早さで　刀をさばくと新吾の袴がハラリと落ちる

新吾　　あああああつ

文治　　命は大切にするもんだ

腰を抜かす親子、ガチガチと震えている

3人　　はい・・・

文治が姿を消すと、オカマの三吉が助けにやって来る。

三吉　ほら　何やってんのよ　逃げるわよ

新吾　腰が抜けて立てねえよ

三吉　しょうがないね　あら　あんた達もかい？

源三郎・おこう　腰が・・・腰が・・・

三吉　まったく

三人を手押し車に乗せる三吉（かなり力がある）

三吉　さあ　しつかりつかまっておいでよ

三吉と三人の親子大慌てで上手に逃げる

上手より佐吉、トボトボと来る。子供の泣く声。

佐吉　おっと　なにを急いでいるんだい

三吉　うるさいわね　あんたこそ・・・あれ？あんた本当にその子　連れて来たんだね

佐吉　しょうがねえじゃねえか

三吉　あんたも早くここから立ち去ったほうがいいよ　ここはヤバイわよ

佐吉　ああ　わかったよ

三吉 次の宿場にいるから 何か困ったら 「オカマ！」 って叫んでね じゃあ！
源三郎・おこう・新吉 ……じゃあ

三吉、手押し車を引いて走り去る

佐吉 なんだあいつら

道端の丸太に座って。赤ん坊が泣く

佐吉 そんなに泣くなよ ああ よしよし おお よしよし ねんねしな 弱ったなあ

上手より、おその出る。女の旅人らしい。泣き声に驚き。

おその えらい泣いてるが どうかしたのかい？

佐吉 へい 何だか泣きやまねえんですよ

おその シッコしたんじゃないのかい ここに下ろしてみなよ

佐吉 へい（子供を下ろす）

おその おおよしよし やっぱりこんなに濡れているじゃないかねえ かわいそうに お前さ

ん連れはどこかに行ったのかい？

佐吉 いや あつしは独り者なんだ それにこの子は俺の子じゃあねえんで

おその えっ！じゃあこの子はどうしたのさ

佐吉 それがちよつと訳があつて

おその お前さん！・・・まさか人を切つてこの子を連れて来たのかい

佐吉 違う違う ちがいますよ

おその それじゃあなんだい 誰の子なんだい

佐吉 ・・・見ず知らずの子を 押し付けられたんでさあ

おその 押し付けられたつて あんた・・・で どうするつもりなんだよ

佐吉

おその しょうがないね おしめは持つてないのかい

佐吉、 渡された風呂敷からおしめらしき物を出す。おその手際よくおしめを替える。

おその 女の子か・・・かわいいね（ホテル泣き出す）こんなにおしっこしてさあ お乳はい

つやつたんだい？

佐吉 やつてねえんで 俺は男だから 乳は出ねえし

おその バカだねえ お前さんが出してどうすんだよ 貰い乳でもすればいいじゃないか 何

もやらなきやこの子は死んじまうんだよ しょうがないねえ

おその、 佐吉から離れるとホテルに乳をやる。

佐吉 おめえさん 乳が出るのか？

おその ああ あげる子がいなくてねえ さつきから乳が張って困っていたのさ

佐吉 どうして おめえ……

おその こつち来るんじゃないよ 今 いい子で飲んでるんだから かわいいね 無邪気に吸

い付いてるよ このときだけだね 女が幸せを感じるのは

佐吉 おめえさん 自分の子はどうしたんだ？

おその ……

佐吉 捨てたのか？

おその バカ言ってるんじゃないよ 誰がかわいい我が子を捨てるもんかね

佐吉 じゃあ……

おその 死んだんだよ 風邪をこじらせてね あたしがいけないんだ

佐吉 ……悪いこと 聞いちまったな

おその いいのさ これも運命だからね

その時、一陣の風が吹く

佐吉 冷えて来たな

佐吉、自分が羽織っていたカッパを、おそのにかけてやる。

おその お前さん 何で旅なんかしてるんだよ

佐吉 別にしたくてしてる訳じゃねんだ

おその 追われてるのかい？

佐吉 どうも人から誤解される性分らしい その子も何だかわからねえうちに押し付けられ

ちまった

おその 笑つちやうね・・・ 気をつけなよ あんまり人がいいと 今に辛い別れをしなくちや

ならなくなるよ

佐吉 別れて辛くなるような知りあいはいねえよ

おその わかつちやいないね

おその役は恐らく「男の役者」だ。かなり気持ち悪い姿になるだろう。そこでフリートークを一発。

佐吉 ……おめえ ほんとうに乳がでるのか？

おその なに疑ってるんだよ あんたも吸ってみるかい？

佐吉 いや いい

フリートーク終了。軽いジャブ程度でいい。もとにもどって

おその さあ お腹は一杯みたいだよ

佐吉 手数をかけてすまなかつたなあ

おその ほら お父ちゃんにおぶってもらいな

佐吉 お父ちゃん？

おその そうさね この子にはあんたしかいないんだからねえ

おその、佐吉にホタルをおぶわせる。

おその おしめを川で洗ってくるから あんたそれまで火でもおこしておいておくれな おし

めを乾かさなくちゃいけないからねえ

佐吉 お前さん なんで一人旅なんかしてるんだ

おその そんなこと知ってどうすんのさ

佐吉 別にどうするってことはねえけどな

おその カタキ討ち……って言ったら聞こえがいいかい？

おその、奥の川へ降りていく。

佐吉 カタキ討ち……

ホタルが泣き出す

佐吉 なんてこった 俺にやとても無理だなあ 子供なんて育てられねえや

下手よりヤクザ衆が現れる。佐吉、とつさに隠れる。

辰五郎

ちくしょう あいつら騙しやがったな

虎吉

佐吉どころか 熊もいませんでしたねえ

熊三

今度会ったら ミツバチの巣の中に放り込んでやる

又八

蜜はその前にいただいちやうけどね

富吉

おお いいなあ 俺はハチミツに目がねえんだ

重

そそそそそ そうだ ふふふふ ふんとおいしいよ

辰五郎

ばかやろう！こんなときに くだらねえ話してんじゃねえ

富吉

そうだ 俺達は佐吉の首を取りやいいだけだ

辰五郎

その通り 房吉親分のカタキを打つんだ

虎吉

親分……(悲しい)

又八

佐吉の野郎 どこに行きやがったかなあ

重

まままだ まだ ここここ ここを ととと 通らねえかも しししし しれねえな

あ

熊三

木曾の親分 まあ 一休みしますか

辰五郎

おお そうするか(それぞれ座る)

富吉

なんだこりゃ 火を熾そうとした後があるぞ

辰五郎

……誰か隠れてやがるな

熊三 親分！

辰五郎 やろうども 佐吉だ 探せ！

ヤクザ衆、辺りを探す。そこに佐吉現れる。

佐吉 探すまでもねえよ 俺はここにいるぜ

虎吉 おう てめえが佐吉か！

辰五郎 へへへへ とうとう追いつめたぜ やい 観念しろ佐吉

佐吉 待て 俺は確かに佐吉だが あんたたちに関わりはねえぜ いったいどこの さんでしたかねえ

辰五郎 しらばつくれんじやあねえ！俺は木曾の辰五郎だ 俺の柑棒 房吉をたたつ切ったじや

ねえか おう 覚えがねえとは言わせねえぞ

重 そそそそ そうだ

佐吉 何を言っているんだ 言いがかりにもほどがある

虎吉 諏訪の房吉親分だよ 一年前だ

又八 これだけ言えば分かるはずだ 刀を抜け

佐吉 なんのことかさっぱりわからねえや 諏訪の房吉とは若い頃 杯を交した仲だ その

俺が兄弟の契りを交した房吉を手にかける訳がねえじゃねえか・・・人ちがいだ
今更なにを言つてやがる 房吉親分を殺して 諏訪の縄張りぶん取ろうとしたんだろ

辰五郎 う 調子のいい野郎だぜ

佐吉 冗談じゃない 縄張りがほしけりや 俺はなんで旅なんかしてるんだ

辰五郎 そんなこと知ったこつちやねえ

重 そそそ そうだ

富吉 ちくしょう！

富吉、佐吉に切り掛かる。

佐吉 待ってくれ そんな覚えはねえって言ってるだろう まったく今日はなんて日だ

子供の次はカタキ打ちか 勘弁してくれ

熊三 覚悟しやがれ！

熊、佐吉に切り掛かる。

佐吉 人違いだよ

辰五郎 兄弟分のカタキを討たなきや 残された房吉の子分どもにも顔向けができねえおう！

野郎ども 構うこたあねえ やつちまえ！

子分たち おう！

大立ち回り。しかし、佐吉は刀を抜こうとはしない。軽くいなして。

佐吉 命を粗末にするんじゃないやあねえ やめろ！

子供たち、まったく佐吉のいうこと聞こうとはしない

佐吉 おめえたちには 親兄弟はいねえのか 愛しい女房は？子供はいねえのかい

富吉 しおらしいことぬかしてんじゃないやねえ 覚悟しろ！

佐吉 バカ野郎！俺はやっちゃあいねえ 何かの間違いだ

その時、おそのが、おしめの洗濯を終え騒ぎを聞きつけ現れた。

おその なんだい なんだい！騒がしいね。

おそのの姿を見てヤクザ衆立ち止まる。

辰五郎 なんだてめえは・・・おつ 姉さん・・・どうしてここに

佐吉 姉さん？あんたの連れか？

おその 連れじゃないが 知らない連中じゃあないよ

辰五郎 姉さん こいつですけど 房吉をたたつ切ったのは

佐吉 あんたは房吉の女房か・・・

おその あんた 佐吉かえ

佐吉 ああ 俺は確かに佐吉だ

おその おまえさん うちの人を切ったのかい？

佐吉 なんて俺が房吉を殺さなきゃならないんだ

重 だだだ 黙れ！

熊三 ふてええ野郎だ

又八 やつちまえ！

おその 待ちな！この男が赤子を背負っているのが見えないのかい？

辰五郎 赤子？

虎吉 何だよ こいつ赤ん坊を背負っているぜ

富吉 子供をダシにして命ごいか 女々しい野郎だぜ

おその 木曾の辰五郎親分

辰五郎 おお

おその おまえさん 房吉が切られたところを見ておいでだったと言ったよね。

辰五郎 もちろんでさあ

おその その佐吉は本当にこの男だったのかえ

辰五郎 いやだなあ 姉さん 俺を疑うんですかい

おその ちよつと気になってねえ

辰五郎 この佐吉に間違いありません なあおめえら

子分たち (俺達は見えないと口々に言っている)

辰五郎 バカ野郎 てめえら！

子分たち すいません

佐吉 ほらみろ みんなこの男に担がれているんだよ

辰五郎 何！

又八 てめえ 木曾の親分に何てこといいやがる

熊三 この野郎 生かしちゃおけねえ やつちまえ

子分たち おお！

派手な殺陣となる。止むを得ず佐吉も刀を抜く。その時、背中のホタルが堰を切つたように泣き出す。

佐吉 ちくしょう ホタル泣くんじゃねえ

辰五郎 へへ、子供と一緒に冥土に行きな。

辰五郎、佐吉に切り掛かると、そこにおその立ちふさがる。

辰五郎の刃にかかるおその。その場に倒れる。

佐吉 ばかやろう 何をしやがる

辰五郎 しまった！

熊三 姉さん！

虎吉 親分さん！こりやまずいよ。

又八 姉さんを切ったとなつちやあ 俺達が今度は追われる身だ。

呆然と立ちすくむヤクザ衆。ところが木曾の辰五郎、開き直って。

辰五郎 やいおめえら。

子分たち ……へい

辰五郎 姉さんは俺が切つて捨てた。よく見たな。

子分たち ……へい

辰五郎 姉さんは 佐吉とできてやがった

子分たち へっ？

辰五郎 佐吉と情を交わして 房吉親分を誘い出した それで佐吉が親分を切ったんだ

富吉 親分 それは…

辰五郎 それが証拠に 姉さん…いや この女は佐吉の野郎をかばい立てしやがった

又八 ……そういうことか

佐吉 この野郎 よくもそんなでたらめを

遠くで人の声

人の声 人殺しだ！ヤクザ同士の殺し合いだ。

ホタルも背中であ泣いている

辰五郎　ちくしょう　おめえら　出直すぞ

子分たち　・・・へい（子分達は姉さんのことが心配だ）

辰五郎　何をやってんだ　さつさとしねえか！

子分たち　へい！

ヤクザ衆下手に退散。佐吉、おそのを抱きかかえ

佐吉　おまえさん　しつかりしろ

おその、佐吉に抱きかかえられて

おその　所詮よ　やくざの女房　いいキミさね

佐吉　弱音をばくんじゃねえ　氣をしつかり持つんだ

おその　いい子だねえ　お腹も一杯になったしねえ　そうだこの子の名前を聞いてなかったねえ

佐吉　・・・ホタルだ

おその　いい名だねえ　ホタルちゃんか　私はね　おそのっというんだよ

佐吉 おその・・・おそのさん 迷惑をかけちゃった

おその 私がバカだったのさ 亭主を殺され 子供も死んで 居場所が無くなって 追い出されるように家を出た あたしゃね あんたを殺すために旅にでたんだよ それがどうだいとんだお笑いさね あんたは人を理不尽に殺せるお人じゃないよ あたしにだつて そのくらいわかるさ

佐吉 しゃべるんじゃねえ じつとしてろ

おその ホタルちゃん 大きくなるんだよ 大きくなつて お父ちゃんを守つておやり お父ちゃんは 人がいいからねえ すぐに人に担がれるんだよ バカな人だよねえ
佐吉 おそのさん

おその でもホタルちゃん できればあたしゃ こんな男と早く知りあいたかつたよ・・・

おその、息たえる

佐吉 おそのさん！

ホタルまた泣き出す。

佐吉 おお よしよし 泣くな 泣くなよ

幕

休憩

三幕一景 「天王森の広場」

チンドン屋 あれから10年がたちました。その間、平野村の「杉の屋」の辺りはすっかり変つて

しまいました。村には若いヤクザが多く目立つようになったのです。村は貧困と暴力にたちまち衰えてしまいました。こんなことになったのには訳があります。宿屋「杉の屋」に文治という男が転がり込んでからでした。お美代の相手は佐吉ではなくこの文治という男でした。それからというもの文治の勢いに押され、あっさり結婚を承諾してしまつたのですが、この男、そうとうの腹黒い男で、周囲のヤクザを手なづけ、地域の役人たちも手を焼いているという強者でした。哀れ「杉の屋」は宿屋を閉め、今では周囲のヤクザたちのたまり場となつてしまつたのです。唯一よかつたことといえば、娘のお美代が少し正気を戻したということぐらいで・・・おつと口上はこれままで。

チンドン屋、辺りを気にしながら退場。太鼓の音。力強く打ち鳴らす。

天王森の広場、ちょうど村は盆踊りの真つ最中。沢山の提灯に浮かび上がる村人の踊り、幾重にもなつて楽しそうに踊っている。櫓の上で打ち鳴らす太鼓のリズムに手拍子。祭りは大いに盛り上がっている。そこにヤクザが5・6人なだれ込んで来て、蜂の子を追い払うように踊りを中断させ、親分が通る道を確保する。怪訝な顔の村人。しかし、文治が姿をみせると皆おとなしく引き上げて行く。

文治 おい！

子分1 へい！文治親分

文治 祭りのショバ代をしつかり絞りあげろよ

子分1 へい 文句を言おうもんなら 痛てえめに合わせてやりますよ

文治 木曾の親分はどうした？

子分1 今 女連中に酒盛りをやらせています

文治 たらふく飲ませてやれ それから袖の下もな

子分1 へい 万事ぬかりはありやせん

文治 江戸に送るツゲ櫛の上がりを半分いただく、まあ、諏訪を通る通行料とでも説明して

おけ

子分1 へい

子分2 親分

文治 なんだ

文治の前に片足をついて頭を下げる子分2

子分2 佐吉の行方がわかりました

文治 何？どこにいるんだ

子分2 諏訪湖の手前 桑原です

文治 何！佐吉は諏訪に戻ってきたのか

子分2 甲州から諏訪に流れて来ました

文治 しぶとい奴だ

子分2 へい

文治 それで 娘も一緒か

子分2 へい ホタルお嬢さんも一緒です お元気でいらっしやるようです

文治 あれから10年か ずいぶん手間をかけさせやがって 諏訪の若い衆を連れて行って佐

吉を始末しろ

子分2 へい

子分がOutかけて行ったのを見届けると

文治 子分の連中はまさか俺が諏訪の房吉親分を殺したなんて思っちゃいねえ 佐吉を始末

して諏訪の連中に恩をきせろ 諏訪はこの俺がいただく

子分1 へい

文治 佐吉の野郎 この顔の傷 殺しても殺しきれねえ。

子分1 心中 お察しいたしやす

文治 お美代 お美代はどこだ。

お美代、ずいぶんやつれた顔で表れる。

お美代 はい

文治 杉の屋に帰って酒盛りの準備をしておけ

そばにいた旦那と女将、遠慮がちに

勘助 文治さん お美代はこのとおり病気がちだ わたしたちでやりますから 今日勘弁

してやってください

お静 私からもお願いします

文治 (だまってお美代の頬を張る)

倒れ込むお美代、旦那と女将お美代をかばう

お静 やめてください お美代が何をしたんですか

文治 態度が気に入らないんだよ

お美代 わかりました わたしがやります

お静 鬼！勝手に家に入ってきて やりたい放題 うち昔から宿屋なんだよ 変な商売は

やめておくれよ

勘助 お静 やめないか

文治 そろそろお母さんも利口になつてくれませんかね 一人娘のホタルは俺の娘だ 俺は

ホタルの親父なんですよ

お静 そのホタルだって 今生きているかどうか

文治 安心してください ちゃんと生きてますよ

お美代 えっ

勘助 ホタルが生きている？

文治 明日あたり戻ってくるでしょう うちの若い連中が今迎えに行っているところです

お美代 ほんとうですか

文治 ああ ほんとうだとも だからさつきと杉の屋に帰って酒盛りの準備をするんだ！

お美代 ホタルが生きている・・・

文治、子分1、上手に去る

お静 あんた 佐吉って人も一緒に帰って来るのかね

勘助 ホタルが生きているとなりゃあ 佐吉も一緒だ 俺は佐吉になんて言って謝ればいい

んだ

お静 ほんとうに酷い誤解をしちまった でも いい人に預けてホタルも幸せだったかも知

れないよ

お美代 ごめんなさい あたしのために お父さんとお母さんをこんな目に合わせちまって

お静 いいんだよ あんたの居ない間に勝手にホタルを預けてしまった私たちも悪いんだ

さあ ホタルに会えることを信じて 家に戻ろう

お美代、ホタルがいるであろうどこか遠くを見つめ

お美代　　今日は良い天気かしら・・・ホタル

三幕二景 (諏訪湖) 暗転幕前

苔むした石の地蔵が一体。上手から、手押し車を押して、旅一座の一行がやってくる。それはあの詐欺師の家族とオカマの三吉、旅鳥の佐吉、そして10才になったホタル。楽しそうに、手押し車を押して来る。ホタルはかわいらしい女の子に育っている。よかった。

ホタル 座長さん！

源三郎 なんだい ホタルちゃん

ホタル 今日はどここの小屋主さんのところに行くの？

源三郎 ほらここから見えるだろう あれが諏訪湖だよ あの街に小さな芝居小屋があるんだ
今日はそこにお世話になるのさ

ホタル へえ 諏訪湖か

三吉 ホタルちゃんは、じきに座長さんになれるわよ この一座にすっかり馴染んでおいで
だもん

ホタル ホタルが座長さん？

源三郎 そうだよ このおじさんはもう引退だ ホタルちゃんは筋がいい 何たって今じゃこの大塚座の看板娘だからねえ

ホタル ねえ お父ちゃん 看板娘ってなあに

佐吉 ははは そうだな 人気者ってことだ

ホタル へえ

おこう あれからもう10年にもなるけど 今でも「杉の屋」は繁盛しているかね
新吉 お袋 ホタルちゃんが聞いてるよ
佐吉 大丈夫だよ ホタルにはちゃんと話してある ここはホタルの生まれ故郷だ
三吉 月日の経つのは早いねえ
源三郎 大塚座がこうして立ち直ったのも 佐吉さんたちのお陰だからねえ
三吉 あたしはどうなのさ これでも客寄せはいいんだよ
おこう 三吉さんのお陰ですよ 何たってこの大塚座の命の恩人だからねえ
三吉 まあ ホタルちゃんには負けるけどねえ
全員 ははははははは
新吉 まったく ホタルちゃんは筋がいい 一緒に舞台に立っている俺まで泣けてくるんだ
佐吉 座長の筋書きがいいんだ
おこう これからも しつかりお願いしたいんだけどねえ
ホタル はい
源三郎 ホタルちゃんは良い子だなあ
新吉 佐吉さんも 一度くらい舞台に立ってみたらいいじゃないですか
佐吉 俺は不調法だから それに俺が舞台に立ったら あんた達に迷惑をかける
新吉 ……そうですか
ホタル お父ちゃん 諏訪にお母ちゃんがいるの？
佐吉 ああ いるよ 諏訪よりちよいと向こうの平野村だ
ホタル お母ちゃん どんな人かなあ

佐吉　　そうだなあ・・・

ホタル　　・・・お母ちゃんに逢いたいなあ

佐吉　　ホタルのおかあちゃんは 杉の屋のお母ちゃんただ一人だ 逢ってみるか

ホタル　　(首を振って)・・・いい

おこう　　まあまあ 佐吉さん その位にしてあげよ あたしやこのままが一番だとおもつて
るけどね

新吉　　ああ 今が一番 「今が福の神でございます」 (台詞調に言う)

全員　　はははは

そこに杉の屋の番頭文吉とおフクが現れる。二人とも旅支度で、相当くたびれた姿をしている。

おフク　　あんた

文吉　　えっ なんだ また休みたいのか さつき休んだばかりじゃないか

おフク　　違うよ あれ ほら あの人

文吉　　えっ・・・佐吉さん

おフク　　そうだよ 佐吉さんだよ

文吉　　おおお 佐吉さん

佐吉、二人に気がつく

佐吉 おまえさんは・・・杉の屋の番頭さん！

文吉 そうですよ文吉です 佐吉さん よくご無事で

佐吉 どうしたんですか 文吉さん おフクさんも

おフク あれからずいぶん あんた達を探したんだよ

佐吉 えっ 俺たちを？ いったいどういう訳だい

文吉とおフク、近くにいる小さな子供に目がとまる

文吉 ……ホタルちゃんかい あんたホタルお嬢さんかい

さつと佐吉の陰に隠れるホタル

ホタル ……お父ちゃん

佐吉 ホタルですよ 今年で十とおになりました

おフク ホタルちゃん ごめんよ ごめんよ 苦勞をかけさせちまつて

文吉 こんなに大きくなつて 佐吉さん あんたホタルお嬢さんをこんなに立派に育ててく
れて

おフク よかった ほんとうによかった

三吉 なんだよ 随分丸くなつたじゃないか いったい どういう風の吹き回しだい？

突然、源三郎が土下座をする。後に続いて、新吾、おこうも土下座をする

源三郎　その節はどうも・・・この通りだ！

文吉　あんた　カタキ打ちの・・・あんた達も

おこう　その節は・・・

新吉　いや　あれから　何となく　仲良くなりまして・・・

源三郎　いや　いいんだ新吉　すみません　私たちは親子の旅一座です　あの時　興業がうま

新吉　く行かず　生活に困って　泣く泣く嘘を　三両を騙し取って逃げました　すみません　でもこのとおりに立ち直りました　三両はお返しいたします

おフク　あんた達は旅芸人だったんだねえ

佐吉　杉の屋の人たちはみんな元気ですかい？

黙り込む文吉とおフク

佐吉　どうかしたんで？

おフク　あんなこととして罰があたったんだよ

佐吉　えっ？

おフク　あれからすぐに　旅姿の男が現れてね　お美代お嬢さんはその男を見て目の色を変えた

文吉　お嬢さんの相手は佐吉さん　あんたじゃなかったんだ　人違いだったんだよ

おフク その男が醜い人でねえ 自分がお美代の相手だと名乗ると 杉の屋に勝手に転がり込

んで 好き勝手のし放題 今じゃ ガラの悪い連中が出入りして 杉の屋はヤクザの
たまり場になっちまった

佐吉 そいつはいつたい何ものなんで？

文吉 岐阜じゃその名もしれた 三日月の文治ってんだよ

佐吉 三日月の文治？岐阜？そりゃあ 黒金の文治のことじゃねえか？そいつだったら俺が

若い頃 顔に一振りの傷を負わせた男だが

文吉 それだ！あの顔の傷 あんたがやったのかい

佐吉 俺も若いころは威勢がよかったからなあ そうか 三日月の文治って名乗ってるのか

い なるほど 今までのことは 文治の仕業だったってわけか あのやろう

文吉 佐吉さん あんた諏訪に来ちゃいけないよ 文治の子分達があんたのことを探し回っ

ているんだ 早くここから戻ったほうがいい

おフク あんた殺されるよ 諏訪の房吉親分を殺したのもあいつなんだ

佐吉 諏訪の房吉親分？ 俺の兄弟分に手をかけたのは文治か・・・おそのさん・・・

文吉 でも子分達は皆あんたの仕業だと思っっている

ホタル お父ちゃん・・・

佐吉 お父ちゃんは大丈夫だよ

文吉 ほら あんた達も一緒に この先に村がある そこに親類がいるから まずはそのこに

身を隠しておくれ

佐吉、苦虫を噛みつぶしている

源三郎　　佐吉さん！

佐吉　　これも身から出たサビ　源三郎さんホタルを連れて　番頭さんの言うことを聞いてくれないか

三吉　　あんたはどうすんのさ！

佐吉　　その三日月の文治つて奴は　ホタルに乳をくれた「おそのさん」の旦那を殺したやつだ　おそのさんは俺とホタルを助けてくれた命の恩人だよ　それに　お美代さんはホタルの実の母親　ほっとけやしねえ

新吉　　佐吉さん　人がいいにもほどがあるよ　そいつらはあんたにホタルちゃんを・・・

そこに10人ほどのヤクザ衆。あつと言う間に佐吉たちを取り囲んだ

子分2　　とうとう見付けたぜ　佐吉　親分のカタキ　覚悟しろ！

佐吉　　まったく凝りねえやつらだぜ

チャンバラが始まる。佐吉、あつと言う間にヤクザ衆を倒してしまう

文吉　　佐吉さん！

佐吉　　番頭さん　ホタルを頼んだよ

佐吉、下手花道から風のごとく去って行く

ホタル お父ちゃん！

佐吉 ホタル！ お母ちゃんは 必ず守ってやるからな

ホタル お父ちゃん！

幕

四場 「再び 杉の屋の前」ラスト

杉の屋の前、文治が子分を集めて酒盛りをしている。そこに村人が意を決して集結し、その期を伺っていた。何も知らない文治は上機嫌で女達をはべらしている。

女達の踊り、宴会は盛り上がりを見せている。(藤間流) 踊りが終わると。

文治 次をやれ！めでたい奴をどんどんやれ

辰五郎 文治さん あんたは大したお方だよ

文治 木曾の親分 あんたにはこれからも いろいろお世話になるんだ たっぷり楽しんで
いっつくれ

辰五郎 ありがとうよ兄弟

文治 おい！酒を持ってこい

子分の声 へい

辰五郎 あんたも相当の悪党だ いい加減にしないと お上も黙っちゃいませんぜ

文治 俺のなわばりで ごちやごちや言わせねえよ 奴らにはタンマリ貸しがあるからな

辰五郎 恐れ入ったねえ はははは

お美代が酒を持って入ってくる

お美代 お待たせいたしました

文治 おい 木曾の親分さんに ちゃんと挨拶をしねえかい

お美代 ……

文治 この野郎 不調法な奴だ 申し訳ねえ兄弟

お美代 お美代でございます

辰五郎 おお いつもすまねえ これからもよろしく お頼みますよ

お美代 ……はい

お美代、三つ指ついて頭をさげると、部屋をでていく

文治 まったく 使えねえ女だ ホタルがいなきやあ 今ごろす巻きにして 諏訪湖の底だ

辰五郎 ホタル？そりやいつたい誰だい

文治 フッ 俺の娘だよ

辰五郎 あんたに娘がいたのか？そりや初耳だ

文治 あの女が勝手に産み落とした子だ どこで野たれ死のうと 俺にはどうでも良かった

んだが 俺が憎んでも憎み切れねえ男の世話になってるらしい

辰五郎 憎んでも憎み切れねえ男？

文治 まあ そいつも もう後がねえ 今ごろカラスの餌にでもなってるさ

辰五郎 佐吉か その面に傷を負わせた？

文治 けっ！胸くそが悪い おい 飲み直すぞ

辰五郎 佐吉といやあ10年前 諏訪の房吉親分のカタキだつて ずいぶん追っかけまわしたよ

文治 憎い佐吉になりすまして あちこちで悪さをしたが ちつとも佐吉はつかまらなんだ

すばしつこい野郎だぜ

辰五郎 その代償が ホタルつて娘っ子かい

文治 お陰で いい寝ぐらができた ここはなかなかの街道筋だ ずいぶん儲けさせてもらつ

たよ ただ あの男に付けられた傷が 今でもズキズキ痛みやがる

辰五郎 でも その傷のお陰で 三日月の文治で名がおつてる おめえさんは 押しも押さ

れぬ信州の大親分さんだよ 何をそんなに脅えることがあるんだ

文治 脅える？俺が佐吉に脅えているっていうのか

辰五郎 おつと 言葉が過ぎたようだ すまねえ

文治 ふざけたことを・・・ 誰が佐吉になんかに・・・

そのとき「杉の屋」の外の方で騒ぎが起こる。村人が何か叫んでいるらしい。

村人1 やい！文治 でて来やがれ

村人2 てめえのお陰でこの村はめちやくちやだ

村人3 出て来やがれ 俺たちはもう我慢ならねえ

その声に文治、杉の屋の外にでる

村人1 文治、覚悟しやがれ

騒ぎに気がついた子分たち、村人を囲む。やがて文治が現れて。

村人2 お俺は怖くねえぞ このままじゃこの村は全滅だ

村人3 この村から出て行け この極道 お上が許してもお天道さまが許さねえ てめえのよ
うな奴は俺がぶつ殺してやる

文治、ゆっくり村人に近づくと面倒くさそうに笑う。そして目にも止まらぬ早さで太刀を引き抜き三人に切りかかる。たちまちのうちに斬られる村人。文治は涼しい顔をして太刀をサヤに収めると、何食わぬ顔をして部屋にもどる。痛がる村人。

文治 バカどもが

子分達 痛がる村人たちを追い出す。(傷は致命傷ではない)

文治 邪魔が入った さあ飲み直すぜ！おい 歌え踊れ！

辰五郎は、その邪気の姿に恐れおののき声を出すことも出来ない。何事もなかったように宴は賑やかに再開する。上機嫌の文治。何かを忘れ去ろうとしているようだ。

文治　　お美代　酒だ　酒を持ってこい！

お美代姿を現さない

文治　　お美代　何をやってんだ　お美代

バン！と障子が開くとそこには佐吉。一瞬の静寂

文治　　てっ　てめえは！

佐吉　　久しぶりだな文治　てめえの顔なんざ金輪際^{金輪際}拝むつもりはなかったがな

文治　　佐吉！性懲りもなく生きてやがったか

佐吉、持っていたとつくりを乗せていたお盆を文治に投げつける

佐吉　　文治　俺の名前を使って　ずいぶん悪さをしたようだな

文治　　相変わらず　身の程をわきまえねえやつだ　ここは俺の縄張りなんだぜ　おい　野郎

ども！

野郎ども　　へい！

野郎どもがやって来る。ものすごい数だ。たぶん二十人から三十人はいる。とにかく沢山の子分。

佐吉　　けつ、しやらくせえ

佐吉、子分たちをバツバツサと切り捨てて行く。あんまり人が多いので一太刀で十人くらいドミノ崩しのように倒れていく。まるでデイズニー映画だ。このシーンは滑稽に描いても構わない。やがて子分が蹴散らされると、佐吉と文治。文治の後には例の諏訪の衆（虎吉、熊三、又八、富吉、

重）

佐吉　　てめえが　ホタルの父親かい

文治　　おめえ　俺の娘を育ててくれたんだってなあ　感謝してるぜ

佐吉　　礼にやあおよばねえ　だがな　房吉と房吉の女房おそのを　俺を捕まえるダシにしたつてことが許せねえんだ

文治　　おいおい　いいがかりを言ってもらっちゃ困るぜ　おい！諏訪の衆

諏訪の衆　　へい！

文治　　親分のカタキだ　やっちまえ

諏訪の衆　　おお！

文治、ここを子分にまかせ、後ろから逃げる

佐吉 待ちやがれ文治！

諏訪の衆に取り囲まれる佐吉

佐吉 おめえら 文治に使われてるのか ざまあねえや

辰五郎 うるせえ！ おい房吉親分のカタキだ やつちまえ

諏訪の衆 おお！

佐吉 聞き分けのねえ連中だ 言つとくが房吉を殺つたのは俺じゃあねえよ

熊三 おめえじゃなきや誰が殺つたつていうんだよ

虎吉 いい加減なことぬかしやがつて

又八 やつちまえ！

諏訪の衆、切りかかる。見事にかわす佐吉。

重 ちちちちきしょう すすばしっこい やややや奴だ

富吉 すばしっこい奴だ！

佐吉 いいかげんに目を覚ませ！おめえたちの親分をやつたのは文治だ おめえらは騙されてるんだよ

虎吉 やかましいやい 大親分がそんなことするわけねえや

熊三 そうだ 大親分は諏訪の面倒まで見てくださってるんだ いい加減なことぬかしてん

じゃねえ

佐吉 へえ じゃあおそのさんは誰に殺されたんだ えっ！ 姉さんを切ったのはその男

だったぜ そうじゃなかったかい？

又八 それはそうだが

辰五郎 そ、それは・・・

佐吉 その男は今じゃ文治大大親分の下で ぬくぬくと私服を肥やしちやいねえかい？そう

いう匂いがプンプンするぜ

辰五郎 うるせええ！おい 早く やつちまええ！

諏訪の衆、 一斉に佐吉に切りかかる。今度は一太刀つづ手傷をおわす佐吉

重 いいいい痛てえええ！

佐吉 おめえたちは いいカモにされているんだよ それが証拠に俺がどう見たって諏訪は

文治の縄張りだぜ

熊三 何お？

佐吉 文治はまんまと 諏訪の縄張りを手に入れたんだ 房吉も草葉の陰で泣いてるぜ

諏訪の衆

佐吉 ・ ・ ・ 文治にいいように使われているだよ わからねえのか

辰五郎 そいつの言っていることはでたらめだ 殺つちまええ！

文治、上手よりホタルを連れて登場。刃をホタルの咽喉に押し付けている

文治　　へへへへ　佐吉　刀を捨てな

佐吉　　ホタル！

ホタル　お父ちゃん！

その後より、文治の子分たちに、源三郎、新吉、おこう、三吉が縛りあげられ連れて来られる

源三郎　　佐吉さん　すまない

新吉　　逃げる途中でつかまっちゃったんだ

三吉　　汚い手でさわるんじゃないよ　しっ！

佐吉　　（文吉とおフクがいない）番頭さんたちは！

おこう　こいつらに殺されちまった　人でなしだよ　こいつら

佐吉　　文吉さんとおフクさんが殺された？

文治　　さあ　言うことを聞いてもらおうか　さもないと　こいつらも一緒にあの世ゆきだぜ

佐吉　　てめえ

文治　　おい！何をぼさつとしてるんだ　佐吉をさつさと殺っちまわねえかい

諏訪の衆、立ち上がって佐吉に刃をむける

文治　　へへへ、年貢の納め時だ　佐吉

そこにお美代が勘助、お静とやってくる

お美代　　その子がホタル？ねえ　ホタルなのかい？

文治　　ああそうだとも

お美代　　それが本当なら　お前さんは我が子に刃物を向けているのかい？

文治　　それがどうした

勘助　　それが人の親のすることか

お静　　鬼だ　あいつはやつぱり鬼だよ

お美代　　おまえさん　やめておくれよ　ホタルを　ホタルを助けておくれ

文治　　しやらくせえ　やいおめえら　佐吉と一緒にそいつらも　叩つ切れ！

身動きしない諏訪の衆。やがて虎吉が口を開く

虎吉　　・・・大親分

文治　　なんだ

虎吉　　俺たちの親分は家族や子分をそりや可愛がつてくれやした　姉さんも俺たち見てえな

ゴロツキを親身に面倒見てくれやした

辰五郎　　虎吉　おめえ何を言つてんだ　さつさとやつちまえ

虎吉　こんな俺の節穴の目にも　今はつきり見えましたぜ　房吉親分を殺ったのは　あんた

だ

文治　なに？

虎吉、辰五郎を切り捨てる

辰五郎　・・・てめえ・・・何しやがんだ

倒れる辰五郎

文治　虎吉　血迷ったか！

虎吉　これは姉さんの分だ　親分のカタキも取らせてもらいますよ　おい　野郎ども！

野郎ども　おお！

文治の子分の半分以上が、今度は逆に文治に刃を向ける

文治　てめえら　裏切るのか

虎吉　そりゃこつちの台詞だぜ

派手なチャンバラが始まる。やがてホタル、源三郎、新吉、おこう、三吉、助けられる。お美代も

旦那と女将にかくまわれている。

暫くして、佐吉と諏訪の衆、文治と文治の子分が対峙する

文治 佐吉 いい気になってんじゃねえぞ 俺を殺つたら ここに居る全員がただじゃあす

まねえぜ

佐吉 何？

文治、佐吉に切り込む。手傷を負う佐吉

文治 へへへ 俺の後ろにやあ五百の子分がいるんだ こんな小せえ村なんざ 一晩で焼き

払われちまうぞ

その時、回りから石ころが飛んでくる。上下から村人が現れる（先程の子分が今度は村人になる）
その数、二十から三十。ものすごい数だ。村人1・2・3がさっきの傷の手当ても痛ましく先頭を
切ってやってきたのだ

村人1 文治 てめえの脅しなんざあ 怖くねえぞ

村人2 そうだ 散々俺たちをイタブリやがって てめえなんぞ地獄に落ちろ

村人3 俺たちをなめるんじやねえ

また、石ころが文治めがけて飛んでくる

佐吉 源三郎さん！

源三郎 なっなんだい？

佐吉 ホタルの目 何かで覆ってやつてくれませんか

ホタル お父ちゃん

佐吉 見るんじゃねえホタル おめえはあっちに行つてろ！

ホタル やだ やだよ

源三郎、ホタルの目を隠し一緒にハケル。

佐吉 あんたたちは 手を出さねえで おくんなさいよ

文治 てめえらも手え出すんじゃねえぞ

文治の子分 へい

佐吉と文治、お互いに刀を向ける。白熱した戦い。二人が下手に行けば、下手の人々はササツとよける。上手に行けばまたうまく場所を開ける。一瞬の隙をついて、佐吉が文治を切り込むと、袈裟懸けに切られ文治は果てる。身動きできずに見守るヤクザ衆と村人衆。

たまらず文治の子分は文治を運んでハケル。それを村人たちは石を投げながら追っていく。諏訪の衆もそれを追っていく。ホタルが源三郎を振り払って舞台に走り込む。

ホタル お父ちゃん！

佐吉 すまねえなホタル すまねえ すまねえ

佐吉、ホタルを抱っこすると、お美代のもとへと行く。

佐吉 あんた ホタルのお母ちゃんかい？

お美代 はっはい・・・お美代と申します

佐吉 そうかい ほら ホタル お母ちゃんだ おめえの お母ちゃんだぞ

お美代 佐吉さん

佐吉 あんたには初めて逢ったが やっぱり親子は似てるなあ

勘助・お静 ……佐吉さん

佐吉 ホタル これからはお母ちゃんと一緒に暮らすんだ

源三郎 えっ 何を言ってるんだ 佐吉さん

ホタル やだよ あたいは お父ちゃんと一緒にいるんだ

佐吉 聞き分けのねえこと言うんじゃないやねえ！ 俺は 俺はなあ・・・

三吉 佐吉さん まさかホタルちゃんを置いて行くこうなんて思っちゃいないよね

佐吉 俺は・・・ホタルの父親を この手で切ったんだぜ

新吉 それは・・・そうだけど

おことう 佐吉さん・・・

佐吉 ……もう一緒にはいられねえ

ホタル お父ちゃん やだよ 行かないで

佐吉 ……ホタル

佐吉、そういうと、傷づいた体を引きずり、笠とカップを羽織つて下手花道へと進む。佐吉のもとへ行こうとするホタルを、お静が泣きながら引き止める。笑顔でうなづく佐吉。

佐吉 お美代さん

お美代 はい

佐吉 ホタルはいい子だ しっかり抱きしめて 今度こそ放しちゃいけねえよ

お美代 佐吉さん……ありがとうございます

ホタル お父ちゃん お父ちゃん

三吉 バカな男だねえ……ホタルちゃん 元気でね (泣いている)

ホタル あたいも行く

三吉、下手花道からハケル。源三郎、新吉、おこうも佐吉を追って手押し車で下手花道へ。源三郎、途中で振り返って。

源三郎 ホタルちゃん 幸せにな (泣いている)

おこう いい娘におなりよ

源三郎たち、下手花道からハケル 身が引き裂かれる想いの佐吉 勘助とお静 土下座をして。

勘助 佐吉さん すまなかつた

お静 このとおりだよ 佐吉さん

泣きながら、頭を地べたにこすり付ける勘助とお静

佐吉 やめてくださいませ 礼を言わなきゃならねえのは こっちの方だ お陰でいい夢を見さ

せてもらいやした

ホタル お父ちゃん

佐吉 ばかやろう！ こんな根無し草の極道を お父ちゃんなんて呼ぶんじゃねえ

ホタル いやだ！お父ちゃん お父ちゃん！

佐吉 ……ホタル

お美代、ホタルを強く抱く。ホタルもそれに応える。しかし、それでも佐吉が恋しくて。

ホタル お父ちゃん！……また 逢えるよねえ

佐吉 ……達者で暮らせよ ホタル！

遠くの方から村人の歓声が聞こえる。村にまた平和が訪れるだろう。

佐吉、その声を聞き微笑む。佐吉、さっと踵を返し、下手花道を去ってゆく。

ホタル　お父ちゃん！

ホタルの声が村人の歓声にかき消されていく。

(幕)

(カーテンコール)

登場人物が一同に舞台に立ち、頭を下げる

終わり